知識を引き四恩の為に仏の像を作絵きて験有りて奇しき表を示す縁　第三十五

河内国若江郡遊宜村の中に、練行の沙弥尼有り。其の姓名詳ならず。平群山寺に住む。知識を率引て、四恩の奉為に像を敬画き、其の中に六道を図く。供養の後に其の寺に安置き、因縁の事を暫東西に示す。時に其の尊き像人に盗まれ、悲び泣きて求むれども終に得ず。更に知識を締び、生を放たむと念ひ、其の難破に行きて市肆を徘徊る。時に担ふ篋の樹の上に在るを見る。すなはち種々の生物の声を聞く。篋の中より出づ。是れ畜生の類かと疑ふ。かならず贖ひて放たむと、留りて物の主を待つ。良久にありて主来る。すなはち其の尼等曰はく「此の篋の中より生物の声有り。吾れ買はむと欲ふ。故に汝を待つ」といふ。篋の主対へて曰はく「生物にあらず」といふ。尼等乞ひてなほ止まず。時に市人評りて曰はく「其の篋を開くべし」といふ。篋の主困然りて、篋を捨てて奔走る。後に開き見れば其の像存す。尼等歓喜び、涙を流し泣き矜びて曰はく「吾れ先に斯の像を失ひ、日夜恋ひ奉る。今邂逅に遇ひたてまつる。嗟呼慶しきかな」といふ。市人聞きて、来り集り称歎む。尼等歓喜びて生を放ち福を修る。遂に本の寺に安き、道俗帰り敬ふ。斯れすなはち奇異しき事なり。

日本国現報善悪霊異記　上巻

第三十五縁　あやしき表(しる)の説話。今昔物語集・十二ノ十七に書承。

一 友人。三宝供養のための行動に党を結び力を合せる人々。

二 母、父、如来、説法法師、の恩(正法念処経・六十一)。

三 大阪府八尾市東弓削あたり。

四 行法を修練すること。

五 奈良県生駒郡平群町、斑鳩町あたりに所在したか。

六 地獄道、餓鬼道、畜生道、阿修羅道、人道、天道。

七 業因と生処との対応関係をいうのであろう。どのようなおこないをすれば六道のどこに生まれるのか、ということ。絵解きをしたのであろう。

八 底本訓釈「緡(締か)〈結也、編也〉」。

九 原文「行其難破」。「其」は「於」の意か。難破と放生とのイメージの結びつきは、上巻七縁、中巻八縁、にみえる。

一〇 店。「市肆　上又作市、市音之、訓伊知、肆陳也、下音四、訓伊知久良、謂陳レ貨鬻レ物也」(新訳華厳経音義私記)。

一一 竹製の方形の箱。底本訓釈「篋〈安万波古〉」。

一二 底本訓釈「良久〈二、也ミ比支(左か)爾〉」。「良久　ヤ、ヒサシ」(名義抄)。

一三 底本訓釈「評〈波加利天〉」。

一四 底本訓釈「烟然〈二合、恐也〉」は、誤写。

一五 中巻十七縁にも「我失二尊像一、日夜奉レ恋、今邂逅而逢」とみえる。中巻十七縁の舞台は本説話の舞台に近接する。中巻十七縁も本説話も、ともに尼の説話であるところに「日夜奉レ恋」の表現が大きな意味をもつ。底本訓釈「邂逅〈上音解□、下音詬□、□太万□□〉」。底本上巻九縁訓釈「邂逅〈上音解反、下后反、二合、太万左加爾〉」。

一六 底本訓釈「嗟呼〈二合、阿〉」。

九頁より続く

一六 鉄杖。農具であろう。「鉄杖　唐韻云鑼〈音与レ罷同、加奈都恵〉大鉄杖也」(和名抄)。雷を攻撃するには金属器が用いられた。「鋤」(捜神記・十二・楊道和、西陽雑俎・八・王幹、「鉸」(捜神後記・十・章苟)、「竹炭刀」(太平広記・三九四・陳鸞鳳)、「刀」(広記・三九四・陳義)などの例がある。金属器を用いて雷を傷つける、あるいは捕える説話は、農耕や養蚕とむすびついたかたちのものが古い段階の説話の姿を残している、と考えられる。中世の鬼説話には、雷説話に淵源すると思われるものが存する。たとえば太平記・三十二はじめ諸書にみえる渡辺綱の説話。

一七 底本訓釈「撲〈都久〉」。

一八 雷を神として遇しない。本朝法華験記・下・八十一に、落下した雷を「時有二童男一、従レ空下落、見二其形体一、頭髪蓬乱、形貌可レ怖、年十五六歳、被レ縛二五処一」と描写する。

一九 底本訓釈「髮(髮か)〈久毛流〉」。

二〇 水を支配する者であることをあらわす。